

(V)

「なんと風変りな集会だろう」ひさしく風変りを求めていたにもかかわらず、相遇し得なかった不幸が、この夜花咲いた。だが「なんと馬鹿げた饗宴だろう」という感想は避け難い。そしてまた「偉大な軽さよ」とつぶやかせるものの混乱の夜、そんな世評とは関係なく集会はゆっくりと、または突如として「ヒステリー」のように、或は妊婦の涙のように、ジメジメとつづけられてゆく。

ワッ! という歓声の中に大山の祭典は幕があがった。積み重ねられた塔の中に木の屑が埋められ、その上に石油が注がれ、火がつけられた。海辺の波にあふれた浜の炎の塔は、海の暗黒に映えて大陸文化の朱色を現出させた。美しいと思ったのも束の間、赤外線灯に照らされた大山の、義経のような飛び上りぎまの呪文とともに、パッパパッと酒がビンごと激しく投げ込まれ、塔に当たった破片が飛び散り、観衆は思わず身を避け、景行天皇に征伐された熊襲ではなく、天皇が恐れて逃げたという青い熊襲であることを、大山は除すところなく証明した。彼の男性美、なかんずく眉毛が炎に照らされ「そうだ、その熊襲だ」と確信させた。そんな太古の実存的儀式が浜で行われている間、階下の奥まったところでは、また、なんとこの祭典なんだろうー 小幡が絹帯に包まれて倒れている。横には三羽の白色レグホンが足を縛られて置いてあり、小さな机には、スタンドが点滅する中に、解剖器のメスが鋭く光っている。三羽とも小幡同様帯で巻かれて不思議と動かない。一切が沈黙である。沈黙の白いキャンパスに三羽の鶏と一人の人間が隣合わせた時、信じ難いトリと人間との森が始まったのだ。意味不明の薄暗い法悦が沈黙の中にみなぎった頃、その沈黙を充分測定した解剖が開始された。沈黙の中の白いキャンパスには一滴の血さえもが禁物だ。そして必要なのは確実な死、ファーブルの昆虫記に出てくる。アノ殺し屋の蜂のように優雅に、小幡は針で脳髓を刺して瞬時にオブゼと化した。純白の羽根は漆黒の濡れ羽に変身させられ、キャンパスの純白を悲しく飾って、沈黙の深さを競っている。純白が、姦淫の罪で、苦しみの黒と変ってゆく小幡の帯は、トリと同価の地底で沈黙し、またも、その肉のウマサを夢見るのか、小幡は頭のテッペンまで帯を巻いて深い眠りに陥ちていった。